〔五福とは、一に寿を曰い、二に富を曰い、三に康寧を曰い、四に好む攸は徳なるを曰い、五に終命を考すを曰う。〕

すなわち、「長生きすること」「財産に富むこと」「身体がじょうぶで無事なこと」「徳を好むこと」「自然の寿命を全うすること」を言う。なお、五匹の蝙蝠の間に「卍（＝万字）」の字があるのは、「福」と「寿」とが「万代」続くことを意味している（『中国吉祥図説』王慶豊・陳素・戚相成編著、遼寧大学出版社、一九九〇年、参照）。

ネッシーを探して（？）—スコットランド・インヴァネス—

法学部
北尾　泰幸

８月下旬に、スコットランド・インヴァネス（Inverness）を旅した。「ハイランド」と呼ばれるスコットランド北部にあり、ロンドンから飛行機で約２時間掛かる。名古屋が北緯35度に位置するのに対し、インヴァネスは北緯57度に位置しているので、ずいぶんと北のほうまで行ったことが分かるだろう。８月下旬の日本の気候からは想像できないと思うが、滞在中は長袖シャツにジャケットを羽織るほど涼しかった（しかし、半袖を着た現地の人が少なからずいたのには驚いた…）。

インヴァネスの観光名所をいろいろ旅したが、今回は「ネス湖（Loch Ness）」に絞ってレポートしたいと思う。「ネス湖」の名は皆さんも聞いたことがあるだろう。恐竜・首長竜に似た未確認動物「ネッシー（Nessie）」が目撃されたことで有名な湖である。未確認飛行物体 UFO 同様、ネッシーはいると固く信じている人もいれば、ネッシー物語は捏造であると主張している人もいる。果たして真相はどちらだろうか。ちなみに、ネッシーの最初の記録は、西暦565年キリスト教布教のために訪れた聖コロンバにまでさかのぼるそうで、聖コロンバが村人を苦しめるこの怪物を神通力で追い払ったという記述があるそうだ。ネッシーはそれ以来、何度も目撃されているという話が残っている。

私は「怪物」という呼び名からネッシーはオスだと思っていたのだが、どうも現地ではメスと捉えているようで、ネッシーのことを歌った歌ではネッシーに対して代名詞“she”を用いているし（但し、英語では船を指すのに代名詞 she を用いるため、湖に存在する動物に対して愛着を込め、“she”と呼びかけている可能性もある）、売られているネッシーのぬいぐるみも、メスであることを示すようにリボンなどのかわいい飾りが付けられている。

ネス湖は南北に約38km のびる細長い湖であ

る。一見すると、川のようである。しかし、れっきとした湖であり、その証拠に近くには更に細長い「ネス川（River Ness)」がある。ネス湖を隅から隅まで味わうのにはクルーズ船のツアーに参加するのが一番だそうで、私もツアーに参加し、船でネス湖を旅した。「運よくネッシーに出会えるかも（笑)。」と思い、カメラ片手に風がビュービュー吹く甲板に出てネス湖を眺めることにする。船は、森に囲まれた湖をただひたすら走り続ける。周りは目を引くような建物はほとんどなく、船は自然あふれる森の合間を進み続ける。しかしこの「何もない」自然そのものの風景が、なぜか心を落ち着かせるのである。

自然を満喫するクルージングの旅を始めて１時間ほど過ぎたころ、船の先に何やら建物が見えてきた。「アーカート城（Urquhart Castle)」である。写真を見てお分かりのように、ネス湖に浮かぶアーカート城は形容する言葉が見当たらないほど美しいのであるが、船が近づいていくと、城が少し変わった形をしているのに気づく。城が原形をとどめておらず、朽ち果てているのである。1230年に建てられたこのアーカート城は風化して朽ち果てたのではなく、1296年にエドワード１世率いるイングランド軍に包囲されて破壊されたとのこと。何となく物悲しい廃城が、なぜかネス湖の風景に素晴らしくマッチするのである。もしかしたら、この廃城と湖の風景がネッシー伝説に一役買っているのかもしれない。

このアーカート城がツアーの終着点である。船から降りてアーカート城を散策した。石造りのこの城は大部分壊されているが、残った部分からアーカート城がいかに大きく頑丈な城だったかが分かる。保存状態が一番よい「グラント・タワー（Grant Tower)」に登り、高いところからネス湖を見てネッシーを探すが、ネッシーは機嫌が悪かったのか、東洋からのお客に挨拶をしに出てきてくれなかった。

ネス湖畔だけではなく、インヴァネスの町全体が、都会の喧騒を忘れさせてくれる、のどかなところであった。ロンドンからは少し遠いが、イギリスに行くことがあれば、ぜひインヴァネスまで足を延ばして、雄大な自然を満喫していただきたい。インヴァネスでは美味しい料理にも出会うことができたが、それについては、またの機会にレポートしたいと思う。

D.H. ロレンスの自然観：短編小説『太陽』に関して

経営学部
山田　晶子

ロレンス（D.H. Lawrence 1885－1930）の短編小説『太陽』（*The Sun* 1928）は、彼の後期の作品である。主人公はジュリエットという既婚の女性であり、大都会で強いストレスにさらされて、療養のためにイタリアへ行くことになった。そこで大自然に囲まれて癒されて心身を回復させていく物語であるが、この作品では、特に、太陽の象徴的な力が大きく関わっていて、太陽はあたかも男性であるかのごとく描写されている。

『世界シンボル大事典』によると、「太陽」は、
① 肯定的な意味では光と熱と生命の源泉であるが、熱帯地方では乾燥を引き起こすので破壊の根源ともなる、とある。しかし、ロレンスの『太陽』という短編小説では肯定的な意味で使用されており、人間を蘇らせる命の源であり、神である。
② 月との対比で考えると、太陽の「陽」に対し、月は太陽の光を反射して光るので、「陰」である。ゆえに太陽は「能動的原理」であり、月は「受動的原理」と言える。
③ 西洋では、太陽は「男性」の原理であるが、日本や南ヴェトナムの山岳民族では、太陽が「女性」であり月が「男性」と考えられている。ロレ